

Title	上代 去るといふこと
Author(s)	大秦, 一浩
Citation	京都大学國文學論叢 (1998), 1: 42-51
Issue Date	1998-11-25
URL	https://doi.org/10.14989/137265
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

上代 去るということ

大森 一浩

一

上代において、去るといふ動詞がどのような意味であったかということについて再検討するのが本稿の目的である。ここで問題となる去るといふ語の意味について、一般的理解を『時代別国語大辞典上代篇』（以下、時代別と略記）に見ておく。(一)

さる「去」(動四)

- ① 進行する。移動する。
- ② やつて来る。時間が到来する。
- ③ 去る。離れる。
- ④ 避ける。辞退する。

以上、項目を羅列した結果注意したいのは、②の記述である。②のように「去る」が「(こちらに)来る」という意味を表すというのは、今日的理解に沿わないと考えるのが自然であろう。「去る」と「来る」とは、意味上対をなしていると思われるのに、上代語としては何故にこれらの両立が許されるのか。この疑問を念頭に、「去る」の語意を考察する。そして、これに関わる「夕去れば」といふ語法について触れ

る。

用例の検討は萬葉集を中心とする。(集中の用例は、適宜稿末の分類表を参照。)が、本稿が語意を考察する目的を掲げる以上、訓みに疑義ある場合もあるものの、記紀における「去る」についても対象とする。(二)。

二

「去る」の語意に、一見訝しく思われる「去る」と「来る」との両立を認めた論として、徳田浄「夕去れば」考^(三)がある。これは、もともと、種々の説に揺れていた「夕去れば」といふ語法について(以下「夕去れば」としか記さないけれども、同類の「[時季を表す名詞]+[さる]」という形式を便宜的に「夕去れば」に代表させる)「夕去れば」は「夕去れば」であると結論を導く過程において、「去る」の語意が結果として来るという意になりうることを論証したのであった。

翻つてここに「しぎる」「ぬぎる」などいふ語がある。しぎるは卻行の意であつて、言海によれば後去しぎるの略かとしてある。故にさるは進行・移動の意である。ぬぎるは

膝行の意であつて、ゐの意は(中略)一寸佇立することである。蹲居、座居の貌である。故にゐざるは蹲居の貌で進行することになり、ざるは進行・移動の意である。

(中略) 秋去れば、春去ればなどは現在時は秋又は春にあらざるに時季の遷り廻つてこまで秋又は春が進行するとの意である。それを意譯すると、秋が来ると、春が来るとなる。故にざるの原意は進行・移動の意なれど意譯すると来る、至るとなるのである。

以上の結論部において、去るといふ語は、今日理解されるような方向を本来持たず、文脈によつて「(こちらからこちらへ) 去る」「や」「(こちらからこちらへ) 来る」といった意味(このように方向を有していることを今仮に「方向性」と称する^(四))を獲得するものと解釈されており、それまで定説を見なかつた「夕されば」といふ語法は、「去る」の語意から統一的に説明されている。「原意」が無方向性であるがゆえに、相反する方向を示す場合にも用いうる、といふこの説明は合理的でもある。が、合理的であるだけに相應の根拠が必要であらう。

根拠の一つとして「しざる」「ゐざる」といふ語から原意が知られるとするのは、これらが複合語であるという点に問題があらう。複合語の性質を、具体例「わたる」についてまとめた記述^(五)を見ておく。

動詞の接合する前後関係でみると、「わたる」は後項の

要素になる場合は「一方から他方に移動する」といふ具體的な動作を表す場合もあるが、

聞きつやと君が問はせるほととぎすしののに濡れてこゆ鳴き渡る(從此鳴綿類)(万一九七七)

動作性の具象的意味が薄れ、補助動詞として「ずつと…する」「一様に…する」の意に用いられて、次の「思ひ渡る」のほか、「恋ひ渡る」「咲き渡る」「冴え渡る」

「凍り渡る」など数多くの例が見える。

すなわち「しざる」「ゐざる」において認められる「ざる」語意は、本来の「動作性の具象的意味が薄れ」た複合語としての意味である可能性を指摘できよう。つまり、原意の無方向性が複合語の中に残存したというのではなく、複合語であるために方向性が不在なのかもしれないのである。もっとも、これにより、複合語の形の中に原意が後世まで保たれたという考え方を全く否めるものではないけれども、無方向性を支持する根拠としては慎重を要する。また、「しざる」「ゐざる」といふ形が上代語の用例を見いだせないというのはいはり不安を残す。

或いはまた、「去る」の無方向性の意味を確認する上で、

…この蟹や何処の蟹百伝ふ角鹿の蟹横さら(佐良)ふ何処に到る…(応神記)

という例を引いて説かれることも多いが、「去る」といふ動作の主体には「この蟹」と近称指示語が付されており、詠者

の近辺に在る「この蟹」が移動してゆく様が表現されているから、文脈上、時代別③のように「去る」「離れる」と解して支障はなく、無方向性を示す根拠として明らかではないだろう。

三

ここで、「去る」という語の表記について検討しておきたい。表意を目的とした用字は、同一の訓みをもちながら多様なあり方を示す。言い換えると、これは或る和語意の性質が用字に反映されたものと考えられるから、その和語の意味範疇を知る上で参考となる。

上代において「さる」という訓みが妥当する表意文字としては、「去」以外に、「離」「避」「僻」「退」「謙」「辞」といった用字がある(萬葉集中に確認できるのは、前三例)。これらを一眸してみると、「さる」に方向性がないとは考えがたい。重要だと思われるのは、こういった用字が全く恣意によるのではなくて漢文脈における「去」字の用法から裏付けられるということである。漢文脈上の用法のあり方を概観しておくのに通用の辞典から項目だけ拾ってみる(漢籍用例本文の注釈中、別字に置き換える形で説明があるものはその字を挙げる)。

はなれる(離)。うつる(移)。たちのく。行く(行)。

おちる(落)。さける(避)。見する、放棄する。うしなう(亡)。そむく(乖)。のぞく(徹・除)。とく(釋)。すてる(棄)。へらす、のける(滅)。ころす(殺)。とがめしりぞける(罪退)。おう、かりたてる(驅逐)。

以上の記述から、「去」字は、ここから離れる、なくなるという意味合いで統一的に把握されるものであるといえる。(ただし、前に上代の例として挙げた「謙」「辞」は確認できず、現時点でこれらは和文脈上の理解による訓みであるというにとどまる。が、既に時代別の記述に見たように、辞退の意は、離れる・避ける意から導かれたものと考えて一応の説明はつき、その意味で漢文脈における「去」字のあり方を捉えることは必要である。)

そもそも「去」字は、空っぽの器からふたをはなしたさまにより、のける、ひいて「さる」意を表すようになったものと説かれる(漢)。とするなら、本来「去」字の語性は離れる方向性に基づくものと考えられ、その「原意」から実体的な行動が表現されたものと推察される。結果として、ともかく「来る」という意味を表すことがないのは確認でき、このような意味をもつ「去」字を用いて「さる」という語が表現されていることを思えば、「去る」が無方向性であったというのは考えにくい。

次に「去」という用字により表現された訓みのあり方につ

いて見ておく。「去」字に対する複数の訓みかたは、和文脈での「去」字の理解が反映された結果であり、「去」字に対する和文脈の意味を知る上で参考になる。動詞としての「去」字は、「さる」「ゆく」「まかる」「いぬ」という訓みに大別される。「さる」以外に、と記したが、「去」字による最も多い訓みは「ゆく」である。「去」一字にこれら複数の訓みがあり得ることは、それぞれの訓みによって表現されるそれぞれの動作に共通する性質のあることを示す。全くの同義ではないが、動作として、いずれも移動を表しているこれらの語が、その一面に注意された結果同一の表記をとることは自然である。そして、移動を表すこれらの語は、必ず方向性を有している。これらの語に差異の認められることは自明であるが、それは、それぞれの方向性の差異により達成されるものだろう。逆に考えると、方向性なくしては語間の差異はありえず、方向性は持たなければならないものといえよう。

四

では、具体的に「去る」がどのように用いられる動詞であるのか、形式上の二類を取り上げて文脈上の意味を検討する。ここではひとまず、「夕去れば」のように時間の到来を表すとされる例を除く。それはこれまで見てきた通り、本稿が今

日的理解に沿わない「去る」の意味を問題としていたためであり、このような意味は、時間の到来を表す場合以外には見られないことが確認できる⁽²⁾。

①「主体が」…を去る」形式⁽¹⁾

夕されば み山を去らぬ(美夜麻乎左良奴) 布雲の

あぜか絶えむと 言ひし兎ろはも(三五一三)

任那は筑紫国を去ること二千余里(崇神紀六五年)

是に、避城、賊を去ること近し(天智紀二年)

国を去る心を知らしむ(天智紀二年)

其国の京を去ること、五千余里(天武紀十年)

この形式では、「…を」において動作の起点を示し、そこから離れる方向性を表現する。(他に起点を示す形式として「…より」の用いられる場合もあるが、表現された内容は同様であると考えるこの形式の中に含め、ここではひとまずおく。)⁽²⁾「…を」形式は助詞「を」が省略される例の方が多い。直に逢はず あらくも多く きたへの 枕去らず(佐良受)て 夢にし見えむ(八〇九)

万代に いましたまひて 天の下 奏したまはね 朝廷

去らず(佐良受)て(八七九)

…白玉の 我が子古日は 明星の 明くる朝は しがた

への 床の迎去らず…(九〇四)

②「(主体が)…に去る」形式(二)

吾が兄王、何処にか去りましけむ(履中紀六年)

この形式では、「…に」が動作の帰着点を示しており、そこに向かう方向性を表現する。この場合、帰着点の位置によって方向が定まるので、「去る」の原意の無方向性を支持するかに思われる。前に挙げた応神記「横さらふ」の例についても、おそらくこれと同様に把握した結果、「横にすむ」と説かれたのであろう。しかし、伊勢物語「修行者あひたり」の一節に議論のあることから知られる通り、「に」は一般的に省略し難いと考えられる助詞だから、この解釈は慎重を要する。動作主体「蟹」の性質を考慮し「横向きに去る」と捉えるべきではないだろうか(三)。

以上のように、「去る」が助詞「に」を」とともに用いられる場合、動作の方向性は容易に知られる。が、その方向性は助詞によって導かれたものではないだろう。助詞のあるために方向性が表現されるのでなく、本来方向性を有する「去る」だからこそ動作の起点や帰着点を示す助詞の存在が許されるのである。「去る」の備える方向性が助詞によって顕在化したといってもよい。試みに三節で触れた「去」字の訓みのうち、例えば最多例「ゆく」を「さる」に代替させてみると考えやすい。同一の用字によることから意味上共通する範疇をもつと思われる「ゆく」であるが、「さる」の用をなさ

ない。方向性の差異ゆえである。②形式「…に」の場合差異が微妙だが、「さる」が多く「を」を伴い離れる起点を示して移動する性質を主とするのに対し、「ゆく」が帰着点に向かって移動する性質を主とすることを考えれば首肯しうる。「去る」の原意については又、

是の時に、天地、相去ること未だ遠からず(神代紀)

吾は此の国に留まりて、共に去るべからず(神代紀)

という二例において、「に」や「を」などの助詞によって方向性が示されているわけではないことに留意する。起点も帰着点も示されないが、その方向性は自明である。そして、ここで示されているのは、離れる方向性である。特に後者の場合、「去留」という漢文脈上の熟語にしめされた意味をふまえる用法が示されており、表記について触れた三節の記述と考えあわせて参考となる。

以上のように解釈すると、原意が無方向性の動作を示すと考えerる必要はなく、「去る」は本来的に方向性を持つ動詞であることが確認できようかと思われる。そもその問題に立ち返るが、「さる」の原意が無方向性動作だから「去る(離れる)」「でも「来る」でも表現できるということは、逆に言えば、単に「さる」というだけでは動作の方向がわからないということになる。前の①形式に述べたように、起点を示す助詞の省略例は多いのだが、その場合も方向性は明らかであ

ろう。

「結句、本稿では、「去る」という語の意味は、上代における用法においても今日の理解から逸脱するものでないと考え

五

以上のように考え来て「夕去れば」が問題となる。「夕去れば」語法は既に

さればとは、くればといふ、春さればなどよめり。

『能因歌枕』広本

春されば くればといふなり。『綺語抄』

春されとは春くればといふ也。『奥儀抄』

ゆふされは、夕さり也。萬葉には暮去と書り。されはきたる心也。『顕注密勘抄』

などと、諸注釈(三)に述べられてきたところであり、この理解は動かしがたい。が、前節までに述べたような「去る」語意の用法からすれば、「夕を去る」または「夕が去る」という形式を導かざるをえず、辻褄が合わない。(意味上、「夕」を帰着点とみなして「夕に去る」という形式で理解すると、ほぼ無理なく筋が通るけれども、これは前節に既述したように、「に」格の問題から採れない。)

また、「夕を去る」「夕が去る」では意味不明である。時季

を示す主な名詞に「さる」が下接する用例を挙げる。

夕されば(佐礼婆) 秋風寒し 我妹子が 解き洗ひ衣

行きてはや着む(三六六六)

夕ざらば(去者) 潮満ち来なむ 住吉の 浅香の浦に

玉藻刈りてな(一一二)

：明けされば(左礼婆) 榛のさ枝に 夕されば(左礼

婆) 藤の繁みに はろはろに 鳴くほととぎす…

(四二〇七)

相見らく 飽き足らねども いなのめの 明けさり

(去)にけり 舟出せむ妻(二〇二二)

春されば(佐礼婆) まづ咲くやどの 梅の花 ひとり

見つつや 春日暮らさむ(八一八)

君がため 手力疲れ 織りたる衣ぞ 春ざらば(去)

いかなる色に 摺りてば良けむ(一一二八一)

秋されば(左礼婆) 置く露霜に あへずして 都の山

は 色付きぬらむ(三六九九)

秋ざらば(左良婆) 我が舟泊てむ 忘れ貝 寄せ来て

置けれ 沖つ白波(三六二九)

以上の例は前に引いた諸注釈の理解から外れることはなく、このことは用例全て同じである。本稿の「去る」語意の理解では矛盾を来すことは、

冬こもり 春ざり来れば(去来者) 鳴かざりし 鳥も

来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど …(一六)

という例、「去り来る」という表現からも知られる。

以上から本稿では、「夕されば」語法を、「去る」によつて解することに慎重でありたいと考える。そもそも、「さる」の原意を、無方向性動作と規定したのは、「夕されば」語法を「去る」の語意から統一的に説明しようとしたためではなからうかと考えれば憶測に過ぎるだろうか。「去る」に来るという意が認められるのは、「夕去れば」語法の場合に限られるのである。例えば「夕去れば」と同様に「[時季を表す名詞] + 「さる」という形式をとる用例、

…落ち激つ 清き河内に 朝去らず(安佐左良受) 霧

立ち渡り 夕されば 雲居たなびき…(四〇〇三)

について、「朝去らず」は本稿の「去る」語意で理解される。一つの文脈において、同様の形式で、「さる」が「去る」と「来る」の両義で使い分けられている。このような事態は、実際に語を運用する視座に立てば認めにくい^(二四)。

ともあれ、そのように「夕されば」を「去る」から切り離れた結果、勢い「夕されば」語法はどのように扱われるべきであるか、触れねばならない仕儀となる。

六

「夕されば」語法について、古来すでに提示された説として、「さり」は「しあり」の縮約形であるとするとするもの^(二五)が

あり、この根拠は、

春されば(之在者)もずのかやくさ見えずとも我は見遣
らむ君があたりをば(一一八九七)

という例に見えるように、表記の上で確認できる。が、「夕されば」考^(二六)中において指摘された通り、「しあり」は単に「存在言」であるから、時の到来は示せない。

ここで、本稿なりの一案を提示して稿を結びたい。以下仮設的な論にならざるをえないのだが、それは「夕されば」という表現中の「さり」を「然有」の縮約形として理解するものである。このような「夕然れば」を想定する場合、文法的には、主語「夕」が時季という対象を示し、その述語「然」は主語をうけてその様態を示し、結果、「夕暮れ」という一つの状態が表現されたものと説明できる。この語法は、「雨が降る」「風が吹く」「雷が鳴る」などの自然現象を表す文のあり方と同様に考えられると思われる。

ただし、難は「さる」表記において多数を占める「去」字を訓仮名として処理してしまうことである。また、このような「さり」の用法は、上代語において認められていないのが現状であつて、副詞「然」の用法は「然て」という形式のみであつたとされる^(二七)。用例の多くは「然」よりも「然」である。だから、この考え方は、初めから問題を孕むのであるが、副詞「然」の存在に異議はない。その「然」と対をなす

指示副詞である「か」「かく」が「有」との縮約形を持つており、ここに「然有」の可能性は認められる。平安以降そもそも指示副詞から接続詞まで多様に用いられている。「然有」である。上代にその形式が存在して不自然ではない。

以上、本稿は「去る」語意について考察し、今日的理解に沿わない解釈を避け、結果、それと関わる「夕されば」語法についても試論した。今後さらに語法理解の深化に努めなければならぬ。

「さる」用例分類Ⅰ（表記別） ※題詞・左注を除く。

左良	四例
佐良	十例
佐利	一例
之在	三例
左礼	五例
佐礼	十五例
散礼	一例
離	四例
避	一例
避	三例
僻	一例

「去」

さら	十八例
さり	十八例
さる	一例
され	四十五例

※「去」字による動詞

ゆく	百三十九例
いぬ	二十二例
まかる	一例

「さる」用例分類Ⅱ（用法別）

・「時季の名詞」＋「さる」

春――四十四例 床の辺――三例

夕――三十八例 み山を――一例

秋――二十二例 枕――一例

朝――六例 朝廷――一例

明――四例 常――一例

夜――二例 寢処な――一例

初夜――一例 石本――一例

年は――一例 川淀――一例

枕片――一例

面影――一例

〈注〉

(一) ここでは代表例として『時代別国語大辞典上代篇』を挙げたが、その他『日本国語大辞典』『角川古語大辞典』のように大部のものから簡便な卓上用辞書まで、「去る」の原義について同様の既述を掲載する。

(二) 用例検討のため用いたのは以下の諸本。

『日本古典文学全集萬葉集』（小学館）

『日本古典文学大系古代歌謡集』（岩波書店）

『記紀歌謡集』（岩波文庫）

『日本古典文学大系古事記祝詞』(岩波書店)

『日本古典文学大系日本書紀』(岩波書店)

『古事記大成』(平凡社)

『新訂増補国史大系日本書紀』(吉川弘文館)

なお、用字については適宜通用の形に改めた箇所がある。

(三)『國學院雜誌』第三十一卷第九号

(四)「方向性」という用語について、「方向」という語から、その帰着点に注目したものと理解されるかもしれない。が、ここで表現したいのは、「どこからどこまで」という起点帰着点を内包する意味合いである。後に触れる如く、例えば「行く」と「去る」は、結果として現れる動作の向きは同じかもしれないが、本稿は「方向性」を異にするとする。意味上、主として前者が帰着点に、後者が「起点」に、それぞれ重きをおく性質をもち、その違いが語性の差異につながると考えるためである。「方向性」にはそのような意味を持たせているが、語義が曖昧になり論旨の不明瞭な箇所があるかもしれない。稿者もこの用語に危うさを感じるが、現在他に適切な表現をもたない。仮称の所以である。

(五)『古典文法必携』(學燈社、一九九三年四月)「動詞の用法④古典語の複合動詞」沖森卓也

(六)『大漢和辞典』(大修館書店)の記述による。その他、「去」字のあり方について『漢語大辞典』(四川辞書出版社・湖北辞書出版社)、『漢語大詞典』(漢語大詞典出版社)においても同様の説明がある。

(七)漢籍用例は以下の通り。

〔戦国、齊策〕不能相去。(注)去、離也。

〔呂覽、功名〕見利之聚、無之去。(注)去、移也。

〔広雅、釈詁一〕去、行也。

〔素問、上古天眞論〕八八則齒髮去。(注)去、落也。

〔左氏、襄、二十五〕武子去所。(注)去所、避席也。

〔後漢書、梁鴻傳〕問所去失。(注)去、亡也。

〔鬼谷子、掉闔〕益損去就倍反。(注)義乖曰去。

〔集韻〕去、徹也。

〔左氏、閔、二〕衛侯不去其旗。(釈文)去、除也。

〔呂覽、審分〕居無去車。(注)去、猶釋也。

〔漢書、匈奴傳上〕得漢食物、皆去之。(注)師古曰、去、棄也。

〔孟子、公孫丑下〕則去之否乎。(注)去之、殺之也。

〔禮、禮運〕在執者去。(注)去、罪退之也。

〔漢書、五行志下之上〕夏帝ト殺之去之止之。(注)師古曰、去、謂驅逐也。

(八)この箇所、『新字源』(角川書店)より引用。

(九)但し、「時間の到来」すなわち「[時季を表す名詞]+[さる]」形式のうち、「さる」に打消「ず」がついたもの、例えば「朝去らず」のような用例は、これに属するものとして、つまり「夕去れば」語法とは異なるものとして扱うべきであると考え。このことについては後に触れる。

(一〇)ここに挙げた用例中、記紀については、「を」格が訓みとして記されている確例としての全てである。その他「去+」[起点]「+」[を]格を理解できるものは多数あるが、訓みとして顕現しないためひとまずおいた。

(一一)注九と同様に処理した結果、確例は唯一(しかも別訓あり)。にも関わらず形式の一類に挙げたのは、後述する如く語法把握に関わるためである。

- (二二) 以上の批判的文脈は、「横にすすむ」という解釈に見られる一面に対するものである。つまり、この解釈では、「横」を帰着点を示す名詞と捉えかねない点に注意を促したものであり、形状言として副詞的に解されるなら問題は無い。要するに、現代語訳すると解釈のあり方が明瞭でなくなる。
- (二三) いずれも『日本歌学大系』(風間書房)より引用。
- (二四) 同様の例は集中九例。上接語は、朝、夕、夜、初夜。
- (二五) 契沖『萬葉代匠記』などに見られる諸説。詳細は注三論文を参照。
- (二六) 『時代別国語大辞典上代篇』「さて」の項に明言。なお、指示副詞「さ」「と」「か」との関わりについての記述は、本稿の参考するところである。

(おおはた かずひろ・本学文学研究科博士後期課程)